加藤介春著

眼と眼・集詩

詩集

眼と眼

加藤介春著

紅玉堂藏

Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
5
10
15
20

詩集

眼と眼

加藤介春

著

東京

堂玉新

詩集

眼と眼

加藤介春著

東京

紅玉堂書店

加藤介春氏の詩集に序す

名聲といふ言葉には、ある永遠的の意味がある。たとへば生前に於て名聲がなく、死後に於て大に名聲のあがる人がある。之れに對して、一時的の名聲を人氣といふ。人氣は泡沫のやうなものであり、それが消えてしまつたあとでは、何も殘らぬものであるが、その花々しさが人の心を幻惑する。

世には同じ才能をもちながら、人氣の一世に高い人と、さらに人氣のない寂しい人とがゐる。後代の人々は彼等に公平な名聲をあたへるだらう。しかし生前のことを言へば、人氣のない藝術家の生涯は悲慘である。思ふに人氣の有無は、時代と藝術との關係にもよるだらうが、主としてその人

の氣質にある如く思はれる。概して言へば、人氣は覇氣と比例をする。氣質的に野心家であり、覇氣のある藝術家等は、その作品の實質にかかはらず、一般に人氣が高く、泡沫的にもせよ、生前の名聲に傲つてゐる。反對に覇氣がなく、氣質的にくすぼつてゐる人たちは、後代の名聲は別として世間的に人氣のないのが普通である。

加藤介春氏は、異常な才能をもちながら、人氣のこれに伴はない不運な詩人である。人は介春氏の詩を稚拙と言ふ。しかし稚拙は藝術の出發點である。詩を二十年も作つてゐて、尙稚拙の評を受ける作家がありとすればいかにその人の生活は驚異すべきかな。何となれば彼は、永遠に藝術の出發點たる、純一素朴な熱情を把持してゐるから。概ねの作家等は彼が稚拙を脱する日に、早くその「人生」を失つて、ただ「藝術」だけを完成する。しかるにこの逆は驚くべきかな。かくの如き場合のものは、實に作家としてよりも、人間としての威壓である。

介春氏の詩を長く見てゐる人は、いかに彼が人生に焦燥し、不斷に何物かの「眞實」を熱望しつつ、しかも自己の非力に悶え、恐ろしい苦腦になやんでゐるかを知るであらう。たしかに、或は介春氏の詩は稚拙である。しかも稚拙のもつ心靈の強い力を人は知らない。群衆は巧者を見る。そして下手の偉大さを知らないのだ。ただもちろん美の評價は、人各々の趣味による。僕は僕の見る所を、ただちに諸君に強ゐやうとは思はない。しかしながら僕は、尙自分の觀察をのべねばならない。

介春氏の生活は、冥想でもなくバッションでもない。彼は地獄の鬼のやうに、暗い沼から這ひあがらうとする意志をもつてゐる。換言すれば、彼

は「智」の詩人でもなく「情」の詩人でもない。彼はただふしぎな「意志」の詩人である。意志が眼をあくときに、彼は白晝の景色を見る。その景色の中に犬が吠え、石が倒れ、樹木が怪げな會話をする。

介春氏の心靈は、常に何物かにおびえてゐる。彼は運命論者であり、宿命の石に壓されて、牙を嚙みならす犬である。そして意志が自由を得やうとする時、過激な腦髓の振蕩がきて、眩惑する光の中に、奇異なさまざまの世界をみるのだ。そこでは彼の壓迫されてゐた靈魂が、喉まで見えるアゴをひらいて、晝景の中に喘いでゐる。

介春氏の詩は、陰鬱な鐵鎖のやうに、人の心を曳きづつて重苦しくする詩的な輕快さといふものが全くない。これが一つには、氏の人氣を防げる原因である。およそ詩といふものは、その韻律的魅惑の故に、或は氣分の

高翔的情味の故に、たとへ思想の陰鬱にかかはらず、おしなべて特殊の輕快性詩的美感をもつものである。然るに介春氏の詩は、あまりに重壓する意志が強く、詩的な輕快さが殆んどない。これ實に介春氏が、詩人として の不遇な境遇に居る原因である。まことに彼の詩を讀むものは、靈魂の重みからして、牢獄に曳き入られるやうな氣分がする。暗く、沈鬱に、めいつた氣分!! 多くの人々、特に衆俗はそれを好まない。衆俗は空氣のやうに常に表面に浮びたがる。そして彼らをひきあげ、浮きあがらせてくれるものを、我々の詩に要求してゐる。

介春氏の思想は、明らかに厭人病者のドグマを語つてゐる。しかしながら惡魔主義的ではない。惡魔主義——それは唯美主義とも言はれる——の概念は、ボトレエルの詩を皮相にした。惡と美とに對する古風な哲學は、

もはや近代のものに屬しない。介春氏の厭人思想は、かうした概念を蹈みつぶして、直接彼の氣質から演釋されてゐる。すくなくともこの點で、彼の詩の情操はボトレエルに比すべきでない。即ちより本質的である。

しかしながら彼をボオに比するのは、尙不自然な錯誤であらう。何となれば抒情詩人としてのボオは、一の奇異な熱に燃えてる戀愛詩人でさへあつたから。然るに介春氏の情想には、かかる情緒的のものが全くない。西洋の詩人中、僕は介春氏に類想すべき一人を知つてゐる。即ち露西亞の小說家にして、同時に散文詩人と言ふべきソログーヴである。ソログーヴの思想は、ふしぎな常識し得ない神秘にみちてゐる。かれは子供のやうでもあり また老人のやうでもある。しばしば彼は、意味ありげな謎を讀者に言ひかける。しかしその謎はどこにも理智の鍵をもつてゐない。いかに考へても人はよく解くことができないのである。ただ人々は、ふしぎな思想の情愁

から、或る廣い意味での自然——たとへば雲や、石や、家畜や、木や、子供や、女や——に對する、一種の純朴な愛を感じ得る。

介春氏の詩が、實にまたさうである。この點で諸君は、故山村暮鳥氏と介春氏とのある遇然な類似を考へざるを得ないだらう。山村暮鳥氏は、異常な才能をもちながら、生涯を通じて不幸であり、人氣のさらに無い詩人であつた。そして暮鳥氏ほど、不思議な子供らしい素朴さで、自然を愛してゐた詩人はない。故暮鳥氏は、實に「自然の子供」であり、且つ怪奇な幻想の所有者だつた。しかしながら暮鳥氏は、人生の苦悶や憂鬱を知らなかつた。彼はあまりに素朴であり、そして無邪氣でありすぎた。その天性の趣く所が、彼を童話と童謠の詩人にした。

この點で介春氏は、殆んど氣質を別にしてゐる。ソログーヴが常に死の恐怖におびやかされてゐた如く、彼は存在からおびやかされてゐる。それが

彼の情操を、甚だしくニヒリツクのものに見えさせる。試みに讀者は、彼の「木に」といふ作品を見よ。

木よ　まつすぐに立つてゐる木よ
時々は横になり
いこひたいとは思はぬか

木よ　その高い〳〵梢が
はるかに下を見おろし
そこにねてゐる大きな石を見おろし
そのふてくされめが
うらやましいとは思はぬか

木よ　野は廣く〳〵
しづかである——
そしてただ一つ勇敢な汽車だけが走つてゐる

あれはいい勞働者だが
正直ではたらきすぎるから
今にあのがんじやうな手や足をこはすであらう

それはあんまりいゝことじやない
木よ　横になり
らく〳〵といこひたいとは思はぬか

野は君のためうつくしいお座敷を設けてゐる。

この詩に歌はれてゐる「木」は、ふしぎに薄氣味の惡い、なまなました生靈を感じさせる。それは地獄の人間木のやうであり、ふだんの流血に苦んでゐる。木よ!!しづかに休息せよ!!と言ふ叫びが、いかに恐るべき生命の戰慄を暗示してゐるか。そして同時に、ある子供らしき、自然への素朴な愛が感じられる。おびえたる、後じさりする如き愛である。

人氣のない詩人。稚拙と言はれる詩人。そして實に、ふだんに「眞實」を欲求してゐる詩人。あまりに生一本の人生を有する詩人。これが此の詩集の著者である。この詩集の世に出でる時、世間は例によつて稚拙の定評を下すだらう。私はそれを怖れ、且つ憤慨してゐる。たしかに稚拙は、私

もこれを認めてゐる。集中の或る作品の如き、思想それ自體からが馬鹿々々しく、いかにしても失笑を禁じ得ないやうなものもある。しかしながら讀者が詩集全編を通讀したとき、ふしぎにも或る壓力が、むきになつて肉迫してくるのを感ずるだらう。かつて或る友人が、介春氏の詩を評して言つた言葉は、實に適切であると思ふ。その男はかう言つた。「讀んでゐるときは拙いと思ふ。しかも後になつて印象が殘るのは不思議だ。」と。けだしその印象とは、すべての生一本なものからくる、强い生命的な壓力であるそれが藝術の稚拙を超越して、心情から心情へ、むきになつて迫つてゐる。

現詩壇の病患は、實に才子多くして眞人なく、詩工あつて詩人のないことである。最近さかんに新人が輩出し、年々刊行される詩集の數は非常に多い。しかして此等の新詩集は、何れも小器用に洗練され、利口らしく、氣の利いたらしく完成されてゐる。されば かかる詩壇にあつて、介春氏の如

き稚拙の詩人が居ることは、輕薄な時流に對する、一の大なる警告でもある。

人生への欲情をもたない詩人、浮蕩な文壇的意識で動かされ、巧者と器用で書き流す詩人。僕等はかくの如き者の多產に惓きた。それらの詩は人を輕く悅ばす、器用さに滿足させる。しかもただそれだけである。一笑の後、人はそれから忘れてしまふ。詩からして、强き生命の意欲を感じさせ突きが神經の髓にまで、魔のやうにねばりつく如きもの、生活意志の脅威を感じさせる如きものはどこにもない。たゞ介春氏の稚拙な詩だけが、その逞ましい威力をもつてゐる。もちろん藝術の大なる魅惑は、洗練によつてのみ完全される。稚拙は悅ぶべきものでない。しかも才氣のみあつて實のない藝術と、實のあつて才の貧しい藝術と、人は何れを選ぶだらうか？僕はこれを言ふのである。すくなくとも世間は、加藤氏の生一本な生活か

ら、何物かの刺激を受けねばならないだらう。

萩原朔太郎

私の詩（自序に代ゆ）

これはわたしの第三詩集で、大正四年以後十一年間にわたるわたしの作品の中から選んだものである。約三百篇に近いものゝ中からこの集を編むことは決して難事でなかつた。そしてわたしのいゝ方面も（若しありとすれば）悪い方面もこの集の中に現はれてゐると思ふ。

わたしにとつては詩は或呪はしき運命の試練であるやうに思はれる。神さま、といふやうなものがあるならば、その神さまの悪戯がわたしを詩人たらしめたのかも知れない。わたしの詩は、永遠に眞なる人生の、又は自然の何ものかを掴まうとして掴み得ない非力なる人間の生活記錄だからである。

わたしの詩は人を重苦しくするだらう。あかるさ、かるさ、こゝろよさがないだらう。わたしの詩ばかりでなく、わたしといふ人間がすでにさうだからしやうがない。わたしはわたし自身の本質に反いた詩を書きたいと思はぬ。否いくら書きたいと思ふてもそれは全然不可能であらねばならぬ。

わたしは毒にも藥にもならぬやうな詩を書きたくない。何れかといふとわたしは花を眺めるために罌粟を植えるのでなくて、阿片が取りたさに罌粟を植えやうとしてゐる。

わたしの詩は華やかな生活、浮々とした生活、お人よしの生活、そして安易な生活にはお友達となる資格がないだらう。しかし雲雀のやうに飛び廻り歌ひ廻らうとする諸君が、諸君の背後に目に見えぬ或大きな鎖のつけられてあることを知つたときには、何かの役に立つだらう。

わたしの詩にはトリックがない。

わたしはボードレールが好きだ。ボーが好きだ、萩原朔太郎氏が好きだ。それらの人たちがわたしの詩にどんな影響を與へてゐるかは知らぬが、この『眼と眼』の中のわたしは、矢張、前集『梢を仰ぎて』や前々集『獄中哀歌』の中のわたしである。三つの詩集を通じて流れてゐるわたしの本質にはかはりはない——といふ自信だけは持つてゐる。

萩原朔太郎氏が長文の序を書いてくださつたことを感謝する。深い友情と高い理解のこもつたもので、これは氏が數年前のわたしとの約束を果してくださつたものである。氏によつて貧しいこの集もどんなにか輝いてゐるだらう。

この集の生れいでたのは全く先輩内田好之輔氏の賜物である。氏の甚大なる同情と厚意とに酬ゐるすべを知らぬわたしは、只永遠に感謝の念を忘れぬだらう。

——大正十五年深秋福岡にて——

目次

長き眉

夜の煙草と薔薇……一
四月の春……三
うつくしい風景……五
カルメン……六
美しい罪惡……七
何が欲しいか……八
そよ風……九
夜の林檎……一〇

二つの聲……一一
老婆（その一）……一二
老婆（その二）……一三

青白い蝶

木に……一七
野……一九
變な思想……二〇
ボードレール……二〇
墨……二一
さびしき室……二三
むぐらに與ふ……二四

むくつけき美味……二五
山の憂鬱……二七
松茸山にて……二九

恐しき風景

いつぱいになり過ぎてゐる……三三
變態時代……三五
街頭にて……三八
魔の性……四一
青い螢……四一
おそろしくうつくしい幻想……四三
父……四七

子供と林檎……四八
神さまも許すであらう……四八
南の國より……四八
二つの一……四九
零　番……五一
美しき菓子……五二
悲しき假裝……五四

乳房を賣る

なまめかしき春……五九
或　眼……六一
或　時……六三

夢の惡戯……六三
二つの唇……六五
美しい女性……六五
慘酷の正體……六六
花が走つて來る……六八
金貨を食べる……六九
うどんのやうな女……七〇
魂を賣るといふことについて……七一
復　讐……七二
或る東京の顏……七三

つめたい接吻

赤い二つの薔薇……七九
夜の惰性……八二
銀の感觸……八五
小さきあやまち……八七
まつすぐな白い手……八九
寂寥……九一
憎むちから……九二

夜の犬の幻想

月光と石……九七

寒夜……九九
竹……一〇〇
石が吠ゆ……一〇一
色の惡い月……一〇二
夜の十二時……一〇三
風と木と犬……一〇四
空しき思想……一〇五
或夜……一〇七
健康……一〇九
夜の犬……一一〇
病中月夜……一一〇
風……一一一

夜の思想……一一三

手品師の指

鸚鵡が鳴いてゐる……一一七
夜……一二二
砂原を散歩する人々よ……一二四
春……一二六
風の子と草の葉……一二八
牛……一三〇
春の夜の川……一三一
太陽は横はる……一三三
子供等に……一三六

風と子供……一三七
赤ん坊の手……一三八
赤い山茶花……一三九
青褪めた夢……一四一
川の殺氣……一四三

青ざめた月

人形窯の前にて……一四九
殘忍も美しい……一五一
さびしき信仰……一五五
朝のおち葉……一五七
石の精進……一五九

投げた石……一六二
路傍の石を凝視して……一六三
山上の石……一六六
庭前の石と雨……一六八
或る縊死者へ……一七一
握れる掌……一七三
夕べ……一七五
五階の窓から……一七八
竹と風と石……一八〇

長き眉

夜の煙草と薔薇

テーブルに薔薇が一枝、
夜おそくまで眠らずにゐる赤い薔薇が一枝、
そのまへに腰をおろして煙草をすふ。

これは或る憂鬱な氣體であり、
なやましい煙幕である、
否夜の煙草は
ぬら〳〵としたふしぎな液體である。

それをしつかと嚙みしめて、

夜の妖氣を味ふ、
もう人間の食慾ではなく
おそろしい情慾の一つである。

薔薇よ、おまへもこの奇なる煙草の煙を
すふて見るがいゝ、
そしてこのうつくしい魔力を讃美するがいゝ。

うすぐらい夜の一室に
薔薇よ今
なまめかしい幻影と痲痺と魅惑が溢れてゐる。

それ故におまへは醉うて
おれのたましひに飛びつかふとするだらう、
だが薔薇よ、
そのまへにおれはおまへを食ふてしまふだらう。

四月の春

けふは靜かな
はなやかなお天氣です——
さあ庭にうつくしい薔薇を一本植えませう。

空をあふいで御覽んなさい——
この薔薇は

あのうつくしい太陽に
さゝぐるために植えませう。

これは赤い〳〵薔薇です——
地にうまれたるものゝうちいちばんはなやかですから
わたしたち女性のすべてからさゝぐる
贈り物には何よりもいゝでせう。

おそらくは太陽のお氣に召し、
そうしてもつとわたしたちを美しくしてくれるでせう、
今はきれいな四月の春です。

うつくしい風景

夕べ、
木にもたれたる二つのかげ、
かれら夕べのお祈りをさゝげてゐる、
否かれら敬虔にしてしんじつなその二つのかげ、
二つの唇をあはせて蝶の羽根のごとく慄うてゐる。

これはあまりにいゝことじやないだらう——
若い男女よ、
君達の接吻は長過ぎるやうである。

正直な時計の針が
どんなにかおどろいてゐるだらう——
五分……十分……十五分。

だがこの若い男女は——戀は
或る夕べ、
或るうつくしい風景の一つではあるだらう。

カルメン

うつくしい君の眼と唇と頰とが
うつくしい畫になることがある、
けれどもそれはあまり値うちのないことだ。

君のそのうつくしい眼と唇と頰とが
火のやうな音樂になることがある、
それです——
とても素晴らしいのは。

戀人よ、
今夜はすてきにきれいな月だ、
どうぞいつもの『カルメン』をきかせてくれたまへ。

美しい罪惡

夜の電車に

乘りあはせたうつくしい女よ、
このおほいなる偶然の力のまに〳〵
どうです、僕とたゞ二人の電車を
いつそ地獄へ走らせやうではないか、
その地獄へのお土産は
僕等二人の運命論者がつくつた
美しい罪惡が何よりもいゝだらう。

何が欲しいか

そのうつくしいめでもない、
そのもゆるくちびるでもない、
わたしはなにがほしいのだらう、

おそらくばそのいづれでもない
おまへのもつなにものでもない
そしていちばんうつくしいもの、こゝろよいもの、
おそらくばおまへじしんもしらぬであらう
おまへのすべてゞ
そしていちばんうつくしいもの、こゝろよいもの、
それはもうおまへじしんでもない
たとへばはるのひざしのやうなものだらう。

そよ風

くちづけはほのかなるそよかぜがきて
おしへていつた——

そよかぜはひとしれぬふかきおもひをひめて
もえてゐた、
くちびるにきてもえてゐた。

夜の林檎

こんなにも夜おそくまではなしてをれば、
うつくしい卓上の林檎を見るのもいやになるなり。

あまり夜がふけたのだ、
うつくしい君の眼を見るのもいやになるなり。

もう飽き〳〵して泣きたくなり、

遠くわかれてゐたくなるなり。

二つの聲

うつくしい眼が二つあり、
うつくしい聲もまた二つある。

その聲に二つの言葉を感じ
二つの女性を感じ
朝と夜とに二つの思想を聞く。

『いらつしやい』
『さやうなら』

その聲のどちらがほんとうか、
おそらくは君みづからも知らぬであらう
これは二つの迷ひ路です。

老　婆　（その一）

人間の子も卵からうまれるだらう、
梟（ふくろう）はかう考へた——
なぜなれば梟はそのうすぐらい木の穴ぐらに
あをじろい蛇の卵を見たからだ。
夜（よる）——梟が穴ぐらを出て

そこいらぢゆうを飛び廻るのは、
人間の卵をさがしてゐるのかも知れない——

これはけつして怪談のつもりではない、
なぜなれば、老婆よ、
そのことは君がよく知つてゐる筈だから。

老　婆　（その二）

すてられた煙草のすひから、
そこ〳〵に痩せた婆さん。
で近いうちこの世界では

人間の大掃除がはじまるだらうといふ話です。

青白い蝶

木に

木よ、まつすぐに立つてゐる木よ、
時々は横になり
いこひたいとは思はぬか。

木よ、その高い〳〵梢が
はるかなる下を見おろし、
そこに寢てゐるおほきな石を見おろし、
そのふてくされめが
うらやましいとは思はぬか。

木よ、野は廣く〳〵
靜かである——
そしてたゞ一つ勇敢な汽車だけが走つてゐる。

あれはいゝ勞働者だが、
正直ではたらきすぎるから
今にあのがんじやうな手や足をこはすであらう——

それはあんまりいゝことじやない——
木よ、横になり
らく〳〵といこひたいとは思はぬか、
野は君のためうつくしいお座敷を設けてゐる。

野

野に
牛が横はつて山になり、
そのまへに犬が寢て丘になり、
蛇が來て長々と匍ひ
うつくしい川になる。

これは或る靜かな
野だ——
誰れにも見せることの出來ない
僕の心の中の野だ。

變な思想

バカ……バカ……バカ……バカ、
カバ……カバ……カバ……カバ、

おや〳〵變な思想があるわい。

ボードレール

鶏(にはとり)の足はステッキにい〳〵やうだ——
それは非常にまつすぐだ。

弟よ、その足を一本切つて來てくれたまへ、

僕が若しボードレールを訪ねる時には
きつとそのステッキを携へて行かうと思ふ。

これはたゞ奇なる思想を喜ぶのではない、
さうだ、このステッキはフランスの旅のつひでに
ボードレールの訪問にふさはしいといふだけだ。

だが彼れはどんなにか喜ぶだらう、
さうして更に妖しい詩を書くだらう。

弟よ、ボードレールは『死のなか』に『生ける感覺』を
探してゐたのだ——

で、これは彼れにいちばんいゝお土産になるだらう。

墨

うつくしい詩の書ける夜だつた——
わたしはさらにうつくしい詩が書けやうとしてゐたのに
ふと指の墨を見た、
いつのまについたのか汚ない指の墨を見た。

その刹那、
うつくしい詩は逃げた、
うつくしい思想は逃げた。

馬鹿野郎、
馬鹿野郎。

さびしい室

僕のこの奇なる生活は
けふもまたA町の若い男の情婦殺しを
まつさきに知つたといふのだ——
それはたゞ一般の人達よりも
二時間ばかり早く知つたに過ぎぬが
それでゐてけふの一日の仕事が
一寸光つてゐるといふのだ。

（神よ、この室はあまりにさびし過ぎるやうです）

（新聞編輯室にて）

むぐらに與ふ

白いかぶの根の下を堀り、
青ざめたねぎの根の底を堀り
もうそこは路である、
むぐらよ、
人の通つた足の匂ひがするだらう。

だから、むぐらよ、
君は他へ路をかへねばなるまい——

そこはすぐ臺所だが
君はこのまづしい汎神論者が買うて來た
僅かばかりの白米を盗みに來たのではないだらう。

むくつけき美味

牛よ、けふもいゝお天氣で
君はおほいに食慾をそゝられてゐるだらう——
君のおほきな胃袋は
この廣々とした草むらめがけて
タンクのごとく突進しやうとしてゐるだらう。

青々として

肥つた草だ——
これはみな新らしい春の御馳走だ、
草の葉が十分にあまくなつてゐる。

さあ遠慮なく食べるがいゝ、
君のその穴ぐらみたいな腹いつぱいに食べ
そしてぐつすり眠るがいゝ——

君はあまりにむくつけし、
それ故にまだ誰れも
君を見てあのうまいロースを思ひ出すものはないだらう。

山の憂鬱

山いつぱいに
流るゝ
或る憂鬱な動物のにほひがするだらう、
そのうすぐらい木の下に
むく〳〵とおほきなあたまを擡げて
松茸が生れたのである。

それはちやうど松の木の下にかくれてゐた
山の思想が出て來たのだ——
おや〳〵こいつ

あたまばかりで生きてゐる思想である。

われ〳〵は山いつぱいに
しめつぽい妖氣を感ずるだらう、
どや〳〵と上つて來た
人達もそれを知りどんなにかおどろくだらう。

僕は今山のふしぎな話をしたい——
なぜなればそのうすぐらい藥かげを
のぞいて見たまへ、
すぐそこにどこのものともわからぬ老婆が
たゝずんでゐるだらう。

——それがあの松茸を生んだといふのである。

松茸山にて

おや〳〵君は
山の性を知らぬか——

こゝは或る松山である、
だから君、
煙草の灰をおとしてはいけないよ、
君の今立つてゐるすぐその下から
とてもかあいゝ松茸が生えやうにしてゐるよ。

恐しき風景

いつぱいになり過ぎてゐる

おれのあたまがふら〳〵するのは、
あたまのなかゞいつぱいになり過ぎてゐて
つりあひがとれぬからだ——

おれのあたまが
圖書館になり、
そのなかに脊皮天金總クロースの書物をそのまゝ
つめこんでゐるからだ。

ところでおれの心臓はどうしてゐるのだ——

あゝこのいくぢなし奴が
いつのまにへこたれてしまふたのだ、
もう動き出しさうにもない。

これはあんまりいゝことじやないだらう、
で、おれは先づよりよく生きるためには、
あたまのなかの掃除をせねばならぬだらう。

むづかしいカントの哲學よ、
ダーウインの種の起源よ、聖書よ、
どうかおれのあたまの中から出てくれ、
それからおれにいつもふしぎな說敎をするトルストイよ。

君もロシアへ歸つてくれ。

さうしておれのあたまがきれいになつたら
『キャベツの食べ方』を買うて來やう、
それがどんなにおれの生活をよりよくしてくれるか、
おそらくはどの書物よりきゝめがあるだらう。

變態時代

こゝは或る大きな商店の前である、
金環のステッキがうつくしすぎ、
キッドの靴がなまめかしすぎ
そしてあの陳列棚の中から出てくる年わかき人たちが

男に見え、
又女にも見え——

むかしむかしワイニンゲルが狂死した時代から
いくつもの時代が過ぎて
われ〳〵の時代が來てゐる、
男でも女でもない人間の時代が來てゐる。

こゝは或る大きな商店のまへである、
そのうつくしい陳列棚のなかには
われ〳〵をものぐるはしくし、
病的にする

どんなにかたくさんな商品があるだらう——
それはみなうつくし過ぎる、
なやまし過ぎる、
われ〳〵を氣ちがひにする——

われ〳〵が生きるため神の許した
ほんとうのものはどこにあるだらう、
食べものは——飲みものはどこにあるだらう、
今はふしぎな虚僞の時代が來てゐる。

こゝは或る大きな商店のまへである、

さあみんな來て
鷲鳥の羽根のついた帽子をかぶり給へ、
ダイヤのピンをかざし給へ、
——うつくしい病的な時代が來てゐる。

うつくしい人間の變態時代が來てゐる、
たゞすこしうす氣味わるいといふだけだ。

街頭にて

眼眼眼眼、
女の眼、
男の眼。

女の眼、女の眼、女の眼、
男の眼、男の眼、男の眼。

女の眼、男の眼、
男の眼、女の眼。

女の眼が男に見え、
男の眼も女に見え。

眼眼眼眼眼、
女でもなく男でもない

眼眼眼眼眼。

魔の性

からす、からす、
このひろい麥田の畦にかくれて
、、、、
あたまをあげぬふしぎなからすよ。

麥田の畦にひとりかくれて
終日穴をほつてゐる黑いからすよ、
妖婦よ。

ふかい秘密のつかひであり

暗號であるからすよ、
そして終日泣かぬからすよ。

墓場のやうな穴をほり
そのなかにはいつて見えずなかつたか、
もうゐない不思議なからす。

否どこかくらいところにかくれて
ぢつとこちらを見てゐるだらう——うたゞひ深い
魔性の黑いからすよ。

青い螢

青い螢の光りが
風にふかれておち、
草の葉にとまつて
光つた。

そこには馬が立つてゐた、
うすぐらい草の葉を喰べてゐた、
そしてとう〳〵
螢を食べた。

何んといふ
おそろしいことでせう、

わたしは堅く眼をとぢて
その馬を見まいとした。

が、その螢は
やはり光つた、
大きな馬の腹にはいつて
いつまでも光つた。

おそろしくうつくしい幻想

詩人諸君よ、
君たちのあたまから詩がなくなり、
詩の種がなくなつてしもうたら

うつくしい映畫を見に行くがいゝでせう。

映畫にはうつくしい物語があり
うつくしい幻想がある——
ニタ・ナルディの乳房と、
ナジモヴァの唇(くちびる)と、
スワンソンの眼と
たゞそれだけでも
どんなにか君たちの詩をうつくしくするだらう。

詩人諸君よ、
君たちの詩は痩(や)せてあをざめ、

思想も痩せてあをざめ
そして今うつくしい營養を求めてゐる。

これはふしぎな光線で描かれた
幻影の連續にすぎぬが
人間的な——あまりにも人間的な
夢である、
いき〳〵とした人生である。

さあこゝにみち〳〵た感激と蠱惑と陶醉を
君たちのあたまのなかに吸うがいゝ、
それがみな君たちのうつくしい思想になり、

ふしぎな詩のちからになるだらう——
すくなくともあのニタ・ナルディのおほきな乳房は
君たちのたましひにどんな秘密をさゝやくだらう。

彼等はよくにんげんが氣ちがひになる物語を
聞せてくれる、
（それがあの『にんげんがけたものになる話』である）

詩人諸君よ、
臆病な詩人諸君よ、その代り君たちは
神を罵るうつくしい唇をおそれてはいけない、
神を射るピストルをすらおそれてはいけない。

父

あいらしい嬰兒を日向に出し
犬の子と椽にならべて
つく〴〵と見くらぶるなり。

それはよく似たる顏なり——
とおもひ、その父は悲しくなれり。

人と子と犬の子を
間違へたとて大した損ではない——
とおもひ、その父は泣きたくなれり。

その父は泣きたくなれり。

子供と林檎

おそろしからずや可愛らしい子供は、
眞赤なる林檎を食うて、
それが頰になる。

神さまも許すであらう

子供はよく嘘をいひます、
だがそれは神さまも許すであらう——
たゞ嘘とまことをば取りちがへてゐるだけです。

南の國より

おゝ北國の雪のなかにしやがんでゐる人々、
どうだ、このあたゝかい南の國へ來たらどうです、
もしこの國がにんげんでいつぱいになつたら
そしてもう歩かれぬやうになつたら
にんげんのあたまの上を歩くがいゝ——
諸君の思想を
十分に日にあてるがいゝ。

二つの二

一プラス一

それが二である、
三マイナス一
それも二である。

こゝに二つのおなじ二がある、
そしてまた永遠にことなる二つの二があり
二つの性がある。

わたしにはそのふしぎな二が
さま〳〵の二つのものに見える——
たとへばそれが地と空に見え、
木と石に見え。

おそろしい話だが
それがまた男と女の二つに見える、
永遠にことなる二つのおなじ人間に見える。

零番

にんげんが電柱になることがあり、
鳥が電氣になることがある。

今、
電柱に鳥がいつぴきとまつてゐる、
さあ、

こゝろみに電話のベルを鳴らして
『モシ〳〵零番』とよんで見たまへ、
そのとき君はすぐ通話が出來、
鳥と話が出來るであらう。

美しき菓子

夜、
銀の皿にもられたうつくしい菓子がすきだ、
わたしはそれを見るのが好きだ。
うつくしい菓子はうつくしい處女のごとくに
お座敷をやさしくする、

にんげんのこしらへたものゝうちいちばん神秘で
いちばん繪畫的なもの、
その菓子がお座敷をはなやかにする。
おそらくはにんげんのこしらへたものゝ中何よりも女性に
近いであらう、
否女性そのものだらう、
幽婉にして空想的なもの
その菓子がお座敷をなやましくする。
（こゝは或るれうりやの一室である）
銀の皿に盛られたうつくしい魔術の一つ、

トリックの一つかも知れぬが
それでいゝ、
華やかで――病的で、
そしてわたしはふしぎなるそのうつくしさが好きだ。

わたしは今ひとりさびしくお座敷にすはつてゐる。
だが、もう直ぐに
わたしのよんだげいしゃが來るだらう。

悲しき假裝

犬に尾がなくなつてしまふたら
どんなにかをかしいだらう、

その尾をとつてにんげんにつけたら
にんげんもどんなにかをかしいだらう。

誰れです
そんな假裝をするのは――
否々もうたいぶ
世界のやうすが變つて來て
こんどは犬がにんげんになる時代ださうです。

乳房を賣る

なまめかしき春

わたしの眼が氣ちがひに見えるのは、
山がみなうつくしい花でつくられてゐるからだ——
草や木がうつくしい花でつくられ、
鳥も花のすがたをして飛ぶからだ。

わたしの眼が絶えず慓うてゐるのは、
大空にうつくしい光りがみち〳〵てゐるからだ——
空もまたうつくしい花でくつられてゐるからだ。

わたしの眼がいら〳〵とおちつかぬのは、

地上におちた小ひさい石のかけらですら
うつくしい光りを帶びて廻つてゐるからだ。
木から木になまめかしい風がつたはり、
風はふしぎな讃美歌をうたうてゐる。

このうつくしさは虛僞かも知れぬ、
うつくしい妖氣の類かも知れぬが、
わたしの眼が絕えず燃えてゐるのは
花から花へ猥らかはしい情熱が映つてゐるからだ。

そしてわたしが氣ちがひになるのは、

わたし自身もうつくしい花でつくられてゐるからだ。

或　眼

おまへはどんなにか驚いたことだらう、
おまへの眼はつめたく澄んで慄うてゐた
そして逃げ場をさがしてゐた
そのおど〳〵した眼がつぎの刹那に
犬のごとくに向ふて來た、
その眼だ、おれにたゝかひを挑んだのは。

それはさながら暴風のなかの太陽に似てゐた、
恐怖と悔いと靑ざめた情熱に

狂うてゐた
その眼だ、おれを地におし倒さうとしたのは。

だがおれがぢいつとこらへた時、
約五分の後
おれはもうおまへのくらい二つの眼から
つめたい涙のおちるのを見た、
さうしておれとおまへの戰ひは終つた。

きえ失せよ、
呪はしきそのつめたい情熱の眼よ、
おれたちはもう忘れやう、

それはあまりにおそろしいけだもの、夢だから。

或時

一つの眼が惡魔の眼になり、
も一つの眼が神の眼になる。

その二つの眼が一つになり
やがて又別れて二つになる。

夢の惡戯

こゝに一つのおそろしいトリックがある、
けがれたるうつくしい花がそれである。

こゝに一つのうつくしい魔術がある、
けがれたる花は白くさいて微笑む。
それはふしぎな夜の幻影であり、
おそろしい夢の惡戯である。

こゝは或なやましい空間である、
そしてあの遠い地平が蛇のごとくに思はれる時である。

この惡戯は神の許さぬことだらう、
否神の知らずにゐることだらう。

二つの唇

おそろしからずや
ぴったり合うた二つの唇、
火のやうに燃ゆる唇、
そのときおれはおまへのたましひに接吻してゐた、
そしておまへは
おれが持つポケットの金貨に
接吻してゐた。

美しい女性

うつくしい光りが花を生み、

うつくしい聲が鳥を生み、
鳥と花とで木が描かれる。

うつくしい女性が花を生み、
うつくしい大空が風を生み、
風と花とで野が描かれる。

うつくしい女性はどこから來るか、
それはみだりに話されぬ神の秘密だが、
野にみち〳〵た花と光りで描かれる。

慘酷の正體

處女よよく見るがいゝ、
そこゝに轉がつてゐる木の胴に似た
うすぎみ惡いしれものが男性である。

處女よおまへのすぐうしろから
のこ〳〵と大きな足がついてくるだらう、
それがあのおそろしい男性である——

馬によう似た
うすぎみ惡いけだものがついて來るだらう、
それがおまへを襲はうとする殘酷の正體である。

處女よよく見るがいゝ、
そこゝにたはけた石が笑うてゐる、
それがあのおそろしい男性の笑顔である。

花が走つて來る

うつくしい處女よ、そのうつくしい眼で
前めんをぢつと見つめて
戀人の名をよんで見給へ、
うつくしい山から野から林から
何が走つてくるでせう。
眞赤な罌粟(けし)がまづ
いちばんさきに來るでせう、

鳥も驚けつて來るでせう、
風ももちろん來るでせう。
そしてあの胴のあほきなうすぎみ惡い若者が、
——さうだあなたの戀人が
いちばんあとにのろ〳〵と來るでせう。

金貨を食べる

女らよ、
夜な〳〵金貨を食(た)べたがる女らよ、
しかし今夜はもう食べず抱(だ)いて寢るがいゝ。
さて女らよ、

これはすてきな金貨である、
そして翌朝みな石くれにかはつてゐたとても
それはわたしが嘘をいふたのではないだらう。

うどんのやうな女

彼等陰にして
うすぐらい路地にたゝずみ、
夜な〳〵うどんをすゝるなり。

彼等うどんのやうな女なり。
かつてわたしがうすぐらい溝のなかにすてゝ來た
夜の女なり。

つひにあのあをじろい芹の花とも咲かず、
土鮨のやうにはひ廻りゐし
おそらくば鱗のはえた女であらう。

魂を賣るといふことについて

大したやくに立つかどうか知らぬが、
さあこゝに賣りものゝたましひがあります——
みんな來てねぶみをしたらいかゞです。

この持主は女です——
そして滅多にひとさまに見せぬものです、

いつもダイヤの指輪といつしよに
大切になほしてゐるのです。

もちろんこれは景品つきです——
あのうつくしい火のやうなくちびるを一つ
さしあげることにしませう。

これはあの薔薇の鉢植みたいなもので、
みなさんの居間の飾りにいゝでせう。

復　讐

君はあまりに弱すぎる、

で、亂暴な『男性』が何人も〳〵やつて來て
君をなぶつて行くのです、
うつくしい『女性』よ、
もし君がほんとうにくやしいと思ふなら
君のそのうつくしい唇がいつはりの媚をおくることにより、
または欺瞞の接吻をさゝぐることにより
復讐をするがいゝ、
君はあまりに弱すぎる——
がおそらくばそのうつくしい僞りこそ
君の手のピストルよりも強いであらう。

或る東京の顔

やつと今眼をさまし
おきて來た東京の顏である——
ゆふべも惡いことばかりして、
夜をふかしたので
頭痛がすると言つてゐる。

おそろしい放蕩者である。
で、けふものらくらと暮すつもりだらう。
東京驛の一番汽車はもう出やうとしてゐるのに
まだ寢とぼけた顏をして
考へてゐる。

（高臺のうへから見た朝の東京である）
その中でどこよりも淫蕩な淺草を見るがいゝ、
あのふてくされ奴が
まだすや〳〵と眠つてゐる。

よく見ると投だ出した女の白い足が二本、
はるかに見えるやうに氣がする。

つめたい接吻

赤い二つの薔薇

花饅に赤い薔薇が二枝——
もえあがるやうな盛りの薔薇と、
も一つはやゝおとろへた、沈んだ薔薇とが
とほく別れて行かうとしてゐる。

一つは今し接吻した唇だ、
いき〳〵とした處女の唇だ。

その赤い薔薇はつうんとすまして
上を向いてゐる。

やがて枝からはなれて
高く〳〵飛びあがらうとしてゐる。

それは燒けたゞれた太陽のまはりを
飛び廻つてゐる赤い蛾だ——
うつくしいけだもの〻たましひを探し出し
飛びつかうとしてゐる妖婦の眼だ。

その赤さ、まつすぐにのび上り
天井に燃えやうとしてゐる、
お〻それはなやましい女人のあぶらで燃えてゐる火だ——

そのときも一つの赤い薔薇はぢつとうなだれ、
何事かひとり考へてゐる、
つめたい花はあをざめた萼から
ぬけおちやうとして首のごとくに搖れてゐる。

これとても人間的な——あまりにも人間的な
淫蕩の世界から來た生靈だが、
もう干からびてゐる。

やがてはら〳〵おちるであらう、
さうしてくらい壁のおもてに吸はれて
いづくへか消え去るだらう

（それはたゞなやましいおもひでを一つ殘すに過ぎない）

こゝに二つの赤い薔薇があり、
そのことなつた二つの花のおもひは
とほく別れてしまふであらう。

夜の惰性

泣けるだけ泣いた心を
手足といつしよに投げいだして、
わたしはひとり寢臺によこたはつてゐる。
うすぐらい夜の庭から

とつてきたうつくしい水仙が一枝、
あをざめた眼のやうな花瓣をもたげてゐる、
わたしのすぐかたはらに——寢臺のうへに慄うてゐる。

わたしの細い指さきよりも白く冴えて
うすぐらい地に泣いてゐた花である、
その花が色あせたわたしの涙に
ひやゝかに匂ひはじめる。

深夜水仙のつめたい花の面と、
わたしの冴えきつた魂と
寢臺にふたつならんでいつまでも眠らず、

おそろしい夜のうつゝをつゞけてゐる。

わにしは今二人目の情人に接吻されたところである、
わたしはそれを許したであらうか、
そしてどちらも眞實であつたであらうか。

おそろしい爭鬪から、はた羞恥から
逃げてきたわたしの魂は——あゝこの無慙の奴隷は、
もう泣けるだけ泣いてしまつて、
たゞおそろしいふしぎな夢に慄うてゐる。

わたしはほんとうに二人の情人を愛したであらうか、

水仙よ、もう寢やう、
そしてこのなやましい夜の惰性をわすれてしまはう。

（或る女に代りて）

銀の感觸

もうそこにつめたい秋がきてゐるので、
かほどおまへをうつくしくしたところの
金は夜な〳〵泣いてゐる、
さうして銀はふるうてゐる。

あをざめた星よりもつめたい
銀はおまへのうすぐらい眼のふちに泌むだらう。

おまへの細い指先さを刺すだらう。
それは或る朝ゆきずりに出會うた
銀のごとき處女、
すつきらとした銀線のごとき處女。

もうそこに秋が來てゐるので
おまへは髪を傳うて流るゝ
つめたい風のひびきを感ずるだらう。
おまへの白い手に提げた
草花もつめたくなつてゐるだらう

もうそこに秋が來てゐるので
あらゆるものが慄うてゐる。

まことにそれは人知れず慄うてゐる
銀のごとき處女、
すつきらとした銀線のごとき處女。

小さきあやまち

お娘さんの乳房は臆病者である、
はづかしがりやでほのかなる風の一くさりにも
おどろいて逃げ廻る。

お婆さんの乳房は意地悪で、
陰鬱である、
かたくなで、そしてぶつ〳〵いふてゐる。

夜すや〳〵と眠つたお娘さんの乳房が
寝床からころげ出すことがある、
（覗いてはいけません――それは神のふかい秘密です）

不眠症のお婆さんの乳房が、
あの死に損ひめが
すぐそれを見つけて叱る。

あくる朝、お娘さんのうつくしい乳房は

ゆふべのことも忘れて、
にこ〳〵とおきて來る。

お婆さんの乳房もやがておきて來る
そして朝からぶつ〳〵いうてゐる、
（まあけふもたいへん機嫌が惡いやうである）

まつすぐな白い手

あなたがその白い手を
まつすぐにさしのばした時、
手はどこをさしてゐるでせう。

あなたの白い手が一直線に、
向いてゐるのはどこの世界でせう。

そのしづかなる白い手が
さしてゐるしづかなものは何でせう。

あなたの意思でありちからである、
その手は何にとゞいてゐるでせう。

おゝそこに暴風(あらし)がゐる——
そのおそろしい暴風が今、
あなたの白い手につたはります。

寂寥

おまへが行つてしまふた後(あと)のことだが、
おまへがちやうど座つてゐたその椅子の上に
寂寥がきて腰かけてゐた。

おれはそのうすぐらい顔を見た——
それがおまへの顔に見え
またおれの顔にも見え。

うすぎみ惡いが
せめてもの話對手にした

（寂寥よ、どうぞまたやつて來てくれたまへ）

憎むちから

神よ、
わたしに彼女を憎むことを許し
憎むちからを與へたまへ、
神よ、
わたしはもう彼女を赦さうと思ふてゐる、
が、そのまへにぢゆうぶんに憎まうと思ふてゐる、
おゝ憎むことなしに許すのは虚僞である、
ごまくわしである、
罪惡である、

それ故に先づ憎まねばならない、
神よその憎むちからを與へたまへ。

夜の犬の幻想

月光と石

冬の夜路上におちた石の話だが、
あいつは町はづれからくるびつこの犬と仲よしで
とき〳〵いつしよにそこいらぢゆうを歩き廻ることがある、
さういふ晩はめつたに町へ行かぬがいゝ。

あいつだ、寒い〳〵夜の路上に
殺氣となつて走るのは、
ゆふべも隣りのお娘さんが白い踵を
石にはげしくかまれたさうだ。

きみぢかで、おこりつぽい、
が、石はまた大の臆病者で
かたすみにちひさくかくれ潜んだまゝ
夜のあくるまでたゞひとり泣いてゐることもある。

いつも夜通しさびしがつてゐるのだ、
だから時折あのあをじろい月の光りがさしてくるのを
どんなにかよろこんでゐるだらう——
今夜もちやうどいゝ月だから
見たまへ、何んだか笑ふてゐる。

そしてあいつの笑ふてゐるのが

泣いてゐるのとおなじに見えるのは
何んといふうすぎみわるいことだらう——
きちがひめ、
きちがひめ。

でこれはいゝ話じやないが、
石はよく知つてゐるだらう。
(今夜もわるい感冒患者が
たくさん死ぬるらしいといふことだ)

寒夜

寒夜、

路上におちた石はほんの小さい石くれにいたるまで
みなおそろしい顔をしてゐる、
そいつだ——犬を夜もすがら吠えさせるのは。

竹

地に生えた竹はまつすぐにのびあがり
どこまで行つておもひとゞまるつもりだらう、
竹は天からあやまつておち來り
そしてまた天にかへらうとする生きものである、
あやしい植物である、
否竹は地上にうまれたさま〴〵の思想の中で
何よりもおそろしいすがたをしてゐる、

見よくらい夜がふけわたると
ひとり中天に漂うてゐる、
はげしい妖氣を帶びてのびあがり
一念天に災しやうとしてゐる。

石が吠ゆ

うすぐらい路上の石が
おそろしいすがたをして
犬の走つて行くのを眺めてゐる。
臆病でいぢわるい奴である——
犬が遠くへ行つてしまうと、

ふしぎな聲をして吠えはじめる。

寒夜――路上の神秘で
おそろしいことではあるが、
やがてその石が走り出す。

石は氣がちがうてゐるので、
うすぐらい夜の路上をまつすぐに走つて行き
木に行きあたつて嚙みつかうとしてゐる。

色の惡い月

この頃村に氣ちがひ犬のふえたのは、

毎夜あの色のわるい月が出るからだ。

今夜もたいへん犬の聲がする――さうだもう、
いつもの月が出てゐるらしい。

お隣りの病人さん、かはりはないか、
月が何んだか吠えてゐますよ。

夜の十二時

風はばつたりやんでしまうて
高い〳〵木が一心に眠つてゐるのは
うすぎみ惡いものです、

うすぐらい草の葉がみな垂れたまゝ眠つてゐるのは
更にうすぎみ惡いものです、
ちやうど眞夜中――そして今です
お隣りの化物屋敷にろくろ首の娘が
首をそろ〳〵廻しはじめるのは――
今はどこにも生きものゝおきてゐる頃ではない。
しん〳〵とした夜の十二時です。

風と木と犬

さあ風が大へんに荒れ出した、
みんな來て石をつかまへるがいゝ。

僕の親しい友達であるあの高いポプラの木が
ま二つに折れて飛びさうだ。
犬もよろ〳〵逃げて來た、
どうぞ皆さん犬にも石をつかまへさせてくれたまへ。

空しき思想

おもふことと何も無し、
籐椅子に寢て天井をあふいでゐる、
天井とわたしのあひだに――その空間に
ぽつちりと一つ2の字が浮ぶ。

白い字だ、
おゝそれは何の像(かたち)だらう、
さうして何を敎へるだらう。

おもふこと何も無し、
悠々としてその2の字がうごき出し
白鳥のごとくに泳いで行く、
天井のかたはしに達するとおどろいてふつと消え
やがてまた新しいのが一つうきあがる。

別な數字だ、
否おなじ數字だ——

さうして何を敎へてゐるのでもない
死んだ數字が永遠につゞかうとしてゐる。

おもふこと何も無し、
ふしぎなる靜かな日。

それはたゞふしぎな記號で
『八月二日けふもまた無事にして無爲』
わたし自身のたましひが
かう空間にかいたのだ。

或夜

夜――うすぐらい野に出て
『馬鹿野郎』
とかう叫んだ。

が、おれはいつたい誰れを罵つたのだ。
默々として大きな山が一つ
おれのすぐ眼のまへに寢てゐた。

づう〳〵しいそのふてくされ奴が
素晴らしい威力をもつてゐた、
で、おれはもうかなはぬと思ふた。

さうだ、どこかに逃げ出して
猫のごとくすみつこにかくれてゐやう、
さうしてひとり泣いてゐやうと思ふた。

健康

まづじゆうぶんにはたらいて歸つて、
じゆうぶんに食ひ且つ飲んで
笑うてみたまへ、
君の胴がおほきく笑うと
君の手足は踊るであらう、
たれはふしぎな健康である、
そしてふしぎな幸福である。

夜の犬

夜、わたしが町で出會うたのは
ボーラ・ネグリの山猫リシユカじやなかつたか、
いやあれは青白い映畫の中からぬけ出して來た
一疋の犬でせう、
こんなに冴えた月の夜をひとり歩いてゐると
わたし自身のあたまの中からも
犬が出て來て
その幻影がふしぎな映畫に見えるでせう

病中月夜

このまつしろい月の光りはどうだ――
見てゐると
眼まひがしさうだ。

あかるすぎる夜だ、
うつくしすぎる夜だ、
妹よ
もう窓の戸をしめてくれたまへ――
梟がはいつてくるかも知れぬよ。

風

風はおほきなあたまをした圓い坊主だ、

風は手もなく足もないば生きもので
象のごとくのろ〳〵と歩いてゐるが、
すばやい奴で葦の葉の二三本しげつた中にもかくれ
淺い水のうへにも消えうせる、
それはみな草や木に化けるのだ。

風はよくおもしろい口笛を吹いたり、
小娘の白い足もとに惡戯をしたりする、
それはみな人間に化けるのだ。

見たまへさつき水の底にかくれた風だが、
すぐにまた向ふの土手にあらはれ

おほきなあたまを擡げてゐる。
そしてこちらをふりむいて笑うてゐる。

夜の思想

高い屋根が天からさかさまに生えてゐるやうに見えるのは
おそろしい夜の出來事である、
つめたい風のふいてくるたびごとに、
高い木がぬけ出し
走り出さうとしてゐるのもおそろしい出來事である、
彼等はみなあをざめた月の光りを浴びてゐる
そして不思議なはたらきをしてゐる——
夜のふくるにつれ、

家の外には見たこともないさまざまの思想がさまざまのかたちをして立つてゐる。

手品師の指

鸚鵡が鳴いてゐる

さあ進め
先頭の駱駝よ、
おまへの高い、瘤だらけの脊に
赤い夕日がてりつけてゐる、
これは見しらぬ國のゆふべだ、
そして日がおれたちに暮れかゝつてゐる。

おれたちはけふこの町に來た、
どうしたところだ、この奇なる家々のつゞけるは、
また奇なる人々の群れつどへるは——

おれたちの前に走り、うしろに廻り、
おれたちの右に左にゐならぶ
このたくさんな異國の人々——
おれたちが何故珍らしいのだ、
おれたちの行列が何故おもしろいのだ。

おれたちはもう疲れてゐる、
あのせまくるしい檻のなかにはいつて
とほい海を渡つた故に、
まつくらい船底に日ごと夜ごと
おそろしい波のうなりを聞いた故に、
そしてやうやく陸に揚げられ

陸の光りをあふいだ故に。

けれども歩め、
先頭の駱駝よ、
象よ、ひぐまよ、ライオンよ、
象はあの高い脊に廣告の旗を立てられ
樂隊のマーチと共に
足を蹈み
あたまを振つて行く——
おれたちの行列がこの町を通るのだ。

どうだ、この町の長さは——

町はまだつきぬのに
おれたちは疲れてゐる、
朦朧としたおれたちの意識に
赤いゆふ日が映つて廻ると、
山や川が映つて廻ると
その暮れかゝつたおほ空をあふいで
青い鸚鵡がしやべり出す。

鸚鵡はとほい故郷のことを言つてゐる——
あのおしやべりやが香ばしい木々の繁りをおもひ出し
赤い實のつらなりをおもひ出して
鳴いてゐる——

うつくしいおれたちの世界はどこにあるのだ、
おれたちの自由の國はどこにあるのだ
かういつて鳴いてゐる。

おれたちは皆默々と歩いてゐる、
たゞ默々として歩いてゐる、
おれたちは昨日も今日もおなじ日だ
いつまでもおなじ日だ、
永遠におなじ日だ——
おれたちは何を見、何を求めやうとして
この町に來たのではない。

けれども急げ
先頭の駱駝よ、
日がおれたちにくれかゝつてゐる、
おれたちの行列がくれかゝつてゐる、
そして鸚鵡が――あのうつくしい
おれたちの兄弟分が鳴いてゐる、
かなしげに鳴いてゐる。

夜

川のおもてがいくつものすぢになり、
そのすぢが一つに合うて流れる
川のおもては一めんにくらい夜になる。

川のうへは霧のにほひに眠たくなり
川ぶちの木も眠たくなる、
さうして風はおもひ〳〵の穴ぐらに消えうせる。

このしづかなるくらい夜
あか〳〵とつけられたともし火を見るに忍びない――
それは流れた血のやうに思はれる。

願はくばわたしをして木や風とおなじものたらしめよ。
自然のまゝのすがたたらしめよ、
風と木は一になりすや〳〵と眠つてゐる。

木も川もすべてしづかに眠つてゐるのに
おもふても恐しい、
たゞひとり人間の起きてゐるのは——

わたしは今何をたくらんでゐるのか、
血のやうなともし火を見つめたまゝ
川ぎしの夜のふけ行くを待つてゐる。

砂原を散歩する人々よ

うつくしい砂原を散歩する人々よ、
どうぞしづかに歩いてください、

うつくしい砂のなかには松露が生え
すや〜とよく眠つてゐる。

そのちさいあたまのうへを踏まないでください。
それは地上にうまれた不思議な貝の一つで
貝のごとくに穴を堀り、
その穴の底にしづかにかくれてゐる。

すぐ傍らにあを〜とした海があるので
魚の卵があがつて來て
つぶ〜と生えたのかも知れない——
それは砂中の秘密です。

それはふしぎな生きものです、
夜砂原の白い月がふけると
砂中にうごきはじめます、
あの小さいあたまを擡げます。

どうぞしづかに歩いてください、
それは非常に臆病な植物で
流れる泡のやうなものです、
踏まれたらすぐ消えうせてしまひます。

春

白帆
悠々、
河を
上る。

船頭
默々、
河を
上る。

春　春　春、
今はたゞのどかにしてしづかなる

春春春。

風の子と草の葉

風の子、風の子、
ゆふべ野にかへり
林にかへり
草の葉にとまつて眠る。

風の子、風の子、
木のなかにしづかに眠り
夜中ふと
おどろいて眼をさます。

風の子は泣いてゐる、
うす暗い
草の葉の夢かげに
慄えてゐる。

風の子、風の子、
家のない小さい風は
梟に喰はれたか、
穴ぐらに吸はれたか。

たゞ殘る草の葉の

夢のかげ、
風の子は泣いてゐる、
遠くきえうせ泣いてゐる。

牛

草の葉あまくにほひて
食欲はやはらかい風といつしよに
限りなく流れてゐる、
そのとき牛は野の草に寝ころび、
じゆうぶんにむさぼり食つてゐる。
おれたちは何故つながれてゐるだらう
おれたちはいつこの綱を解かれるだらう——

牛はひねもす考へた、
そしてひねもす食つてゐた
幸福を食つてゐた。

春の夜の川

春の夜、
河原の石が愛らしい子供の顔になり、
そこいらぢゆうによこたはり
そしてすや〳〵眠つてゐる。

春の夜——川のそこには
たくさんな魚の卵が孵へるであらう、

愛らしい河原の石が
魚のあたまになるやうにおもはれる。

小さい魚の子ではあるが、
風のやうにすばやいやつで
葦の葉にとびあがり、蓼の木によぢのぼる。

水のうへにはたくさんな魚があつまり
青白い月のひかりを吸うてゐる、
それがあのうつくしい銀の鱗になるらしい——

ふとれ〳〵

そして大きな魚になるがいゝ、
その小さい河原の石もずん〳〵ふとつて
大きなあたまになるがいゝ。

太陽は横はる

ある海岸の高い絶壁に、
無線電話の柱が立つてゐる——
夕方それが黒くなる。

まつ直い、
非常に高いそのいたゞきに
あらゆる『世界の報道』があつまる。

つめたい汐風にふかれながら立つ
そのいたゞきに血まみれな『人間の戰報』が傳はり、
また或時はおそろしい天上の『暴風警報』が現はれる。
夜はそのいたゞきが空のまんなかにとゞいて
空をしつかり支へてゐる。
そして世界で何よりも臆病な小さい星が慄うてゐる。
小さい星は何か悲しい空の出來事を
そつと知らせに來たやうに、
また何かいそいで聞きに來たやうに——

人間のこしらへた不思議な器械のはたらきで
夜もすがら
あらゆる『世界の消息』を集める。
鋭敏なそのいたゞきは『世界の運命』を
まつさきに知らうとして
更に高く〳〵のびあがるやうにも見える。
さうしてくらい夜があけると
何事もなかつたしづかな遙か下に、
海のかなたの太陽が横はる。

子供等に

さあ子供らよ、
この大いなる石とちからをくらべて見給へ、
石は地にふかく生えてゐる。

子供らよ、
力のかぎりその石をころがして見給へ——
犬も來て加勢をするといつてゐる。

おや〳〵君ら、もう疲れたのか
石は動かず。

動かず。

石は地にふかく生えてゐる——
そして君らに
力をやらうと言つてゐる。

風と子供

そら風が逃げ出した、
追つかけろ、
追つかけろ。

おほきなあたまの風坊主、

逃すな、
走れよ。

子供よみな來い、
追つかけて
その大、あた、まをつかまへよ。

赤ん坊の手

うまれたばかりの赤ん坊が手をかたく握りしめてゐるのは
うまれぬまへの記憶を、
うまれぬまへの思想を、
ふしぎなる生命の起源を、

父が子につたへた傳統を、
ぢつと握つてゐるのです。

すべてみなうまれぬまへの事です、
うまれぬまへの世界の事です、
父がもしそれを聞いたら
どんなにかおそれるかしれない秘密です。

父よ、何んにも聞かぬがいゝ、
子よ、何にも答へぬがいゝ。

赤い山茶花

泣くなよ風よ、
もう陽が
照る照る。

泣くなよ風よ、
山茶花の咲いた日向が
温いよ。

山茶花の赤い花かげに
行け行け、
温いよ。

青褪めた夢

川ぎしにたゞずめる木ぞかなしけれ、
水のおもてに
うつれるはくらい木の影の冴え。

川ぎしにたゞずめる木ぞかなしけれ、
その高い頂きに
かゝれるは青ざめた月のおもての匂ひ。

慓悍な魚らあつまり
水の香をつたうてのぼり

銀の尾を梢に振れど、

水の音ふかく木のなかにしみ入り、
やがてまた木のなかより出でて
大いなる聲樹上に祈れど、

川ぎしにたゞずめる木はかなしけれ、
木の葉かげ水にうつりて
とほくながるゝ砂の底に流轉し、

しづかなる夜のふくるにつれ、
木のうへと水のしたとに

青ざめた夢隈なくも冴え渡る。

川の殺病

ゆふべうまやの大へんに騒がしかつたのは、
さうして馬がいつまでも眠らずにゐたのは
いつものやつが來てうなされた爲めらしい。

こないだも犬がはげしく足を咬まれて
夜もすがら泣いてゐた、
あをざめた月に向つて吠えてゐた。

うすぐらい淵にひそんだ殺氣であらう。

河童のやうな川の精で
土手にあがると風のごとくに走り廻る。
夜——魚は木の枝々によぢのぼり
石は土手の小道にはひあがる、
おそらくは社會主義てふ思想にでも似たやつだらう。
うすぎみ惡い話だが、
夜の風ともちがふ不思議な氣體で
十二時すぎのそのつめたさにはぞつと身慄ひするさうだ。
眠さうな魚のあたまがごろ〳〵してゐる

うすぐらい川の眞夜中である、
さうして水のおもてはするどく冴え。
水の殺氣が隈なく冴え、
氣みぢかな石はもう土手にあがつて來る——
今夜も用心するがいゝ。

青ざめた月

人形窯の前にて

にんげんのうれひとかなしみと苦しみが
このしづかなる窯のなかにはいつて、
ふしぎな像(かたち)となり、
うつくしい人形となる。

うつくしい踊り兒の眼が空をあふいだまゝ
このなかにはいつてゐる、
うつくしい手と乳と腰部の線が
神々の世界を誘惑し、
神々を氣ちがひにする

そのなまめかしい人形がはいつてゐる。

おれがおれみづからの姿を刻んだ
おそろしい惡魔の像もはいつてゐる——
おれはおれみづからを藝術にするときに
いつもそのおそろしい惡魔の像が出來あがる。

さうだ、皆おれのうれひと悲しみと苦しみが
このしづかなる窯のなかにはいつてゐる、
さあ、火を附けよ、
列にならんだうつくしい妖女の顏に、
不幸なる人々の靑ざめた眼に

あか〳〵と燃えあがる火をつけよ。

ふきのぼる灰色の煙りが
けだものゝ息の如くに湿いでゐる、
さうして窯のなかにはいつた人形は、
或るものは踊るであらう。
泣きさけび狂うであらう。

それは激しく狂亂し
また狂喜する——
今大いなるうれひや悲しみや苦しみに
永遠がうまれる爲めに。

殘忍も美しい

愛らしい星の光りのやうな、
愛らしい赤ん坊の眼のやうな
その赤いおほきな蕾を盜んだのは誰れでもない、
わたしがそれを盜んで
ひき裂いた。

わたしはぢつと眺めてゐた、
手のうへに眞珠のやうに
愛らしい蕾のうごくのを眺めてゐた
そしてわたしは無意識に

ひき裂いた。

このなかに何があるのだ、
かう考へたわたしは
うつくしい蕾を破つて
そのなかにある深い秘密を知らうとした。

やがて無慙なその破片を見よ、
殘忍も美しい、
——血が流れてゐる、
その蕾から花瓣から
人間の血よりも赤い血が流れてゐる。

うつくしい血だ、
汚されぬ血だ、
その血よりうつくしい何ものがこの世界にあるのだ——
殘忍な血も美しい。

それはわたくしのおそろしい殘忍からだ。
けれどわたくはその殘忍を誰れに告げ
誰れに悔いればいゝのだ、
おゝ神に向つてか、
または惡魔に向つてか。

殘忍もうつくしい、
人間の血より尊いうつくしい血は流れ、
血は光つてゐる、
見よひき裂かれた蕾を
無慙なるその蕾もまた美しい。

さびしき信仰

たゞ一枚のおち葉である、
それを卑しむ心になれず、
けふもかなしき山に上る。

數知れぬおち葉を眺めてゐると、

たましひは頭上よりぬけ出し
木をのぼり枝を傳うて
葉にすがり葉と共におち來る。

人間がおち葉になるのは、
かういふ日だと思はれる。

わたしはくらいおち葉のうへに、
キリストのさびしい顔を見た、
キリストのつめたい顔は
木の枝々にも掛つてゐた。

晩秋のくらい世界に、
世界のいたるところに
キリストのさびしい顔があらはれ
さびしい神の教へを說く。

た〳〵一枚のおち葉ですら、
それを拾うて
われとわがたましひに押しあてる。

人間がおち葉になるのは、
かういふ日だと思はれる。

朝の落葉

風はわたしの家のまはりを、
夜もすがらふいてまはつた。

わたしが窓をひらいて見ると、
風の子は馬のやうな聲を出し
うすぐらい木のうへに泣いてゐた。

そのあくる朝風の子によく似た木の葉が
いちめんに落ちてゐた、
そしてまだうち慄うてゐた。

その一枚に、

一枚ごとに
キリストのさびしい顔が映つてゐた——

それはみな高い〳〵空の上から
つたはつたさびしい神の像(すがた)であらう、
さあ朝のお祈りに行きませう。

石の精進

山のふもとに石がたくさんあるだらう、
子供らよ、
それを拾うて山にのぼれよ、
石は山からおちて來たのではない、

あの高い〳〵山を仰いで
そのいたゞきへ上らうとしてゐる——

あはれなる小さきもの、
一念たゞ山上へいそいでゐる、
ちひさなる眞實のもの
山上へ——その永遠の空間へあこがれ、
ふしぎな精進をつゞけてゐる。

子供らよ、
石は今君たちのあとを追はふとして
ころげ廻つてゐる、

そのあはれなる小さきもの、
眞實にして不幸なもの、
そしていつ山上へ達することが出來るだらうか。

子供らよ、
君達の足は元氣だ、
せめてその石のひとつを拾うて
走りのぼれよ、
そしてあの山上をにぎやかにせよ——
石はそのとき君たちといつしよに
さかんなる歡聲をあげて喜ぶだらう。

（石は山に上るといふ愛里の傳說による）

投げた石

力のかぎり投げた石、
石は飛ぶ――にんげんのちからを空に描いて、
にんげんの意思を天に描いて
まつすぐに飛ぶ。

石はくらい山のいただきを鳥のごとく越え、
くらい林のうへを風の如くわたりて
底無き世界の底に消ゆ。

あはれなるにんげんの力と意思をして

ゆくところまでゆかしめよ、
底無き世界の底に消ゆれば
にんげんの仕事は一つ終れるなり。

にんげんの仕事は一つ終れるなり、
投げたる石のふたたび歸らぬといふ
夢のやうなる過去の一つをつくれるなり。

路傍の石を凝視して

道ばたにおちてゐるたゞ一つの石ですら、
それを拾うてわれとわが胸におし當てたくなる。

道ばたにおちてゐる石はつめたい
うすぐらい風におもてを吹かれてゐたから。

またその石はじめ〳〵と濡れてゐる、
あをざめた星のひかりをあふいでゐたから、

おち葉がくらい地をつとうて來て、
何事かこそ〳〵とさゝやきかける。

或時はまたどこかはるかの遠い〳〵世界から、
見知らぬかげがさしてきてさびしく映る。

路傍の石はたゞひとりさびしがつてゐる、
そして無言をつゞけてゐる。

お〳〵それは天上の神が地におきわすれたものかも知れない——
石はぢいつと何事かかんがへてゐる。

そこに大なる神の意思があり、
神の無限のいのちがある。

わたしのまへにその小さき石があるのではない、
わたし自身がその小さき石のまへにあるのだ。

そしてわたしはその一くれの石をすら、
手に乘せて神の世界にさゝげたくなる。

山上の石

或る日山にのぼつた時、
あやまつておとした石は
どこまでおちて行つたであらうか。

うすぐらい麓から、はた谷ぞこから、
石は石のちからによつて
山上の神の世界へのぼると聞いた
そのいたいけな石の一つ。

やうやくのぼつて神に祈りをつゞけてゐた
しづかなる石の一つは今、
眼もくらみ、こゝろも遠くなるばかり
いつさんにころんで行つた。

眼のまへにあるものゝ一つが、
ふとしたるちからによつて
ゆくへ知れずになるといふことを
ぢつと孝へる。

けがれたるにんげんの足にふまれた故に

石は石のちからをうしなうて
奈落の底へおちたであらうか、
それはおそろしい神の世界の出來事である。

それはおそろしい神の世界の出來事である、
おちた石はまたくらい麓から、谷底から、
山上をしたうてのぼり行くであらうか。

庭前の石と雨

木に雨のふりそゝぐのはいゝものだ、
友よ遊びに來給へ、
その木のしたに石を描いて

ふりそゝぐ雨を見るのは更にいゝものだ。

石は丈高くして頭を持ち、
人に似たすがたを持ち
そしてよく立つものが最も奇である。

石はふしぎなものである、
それ故に石みづからが生きると共に
このひろい庭園の木や草を生かしてくれる、
美しくしてくれる。

よく見るがいゝ、

そこには石で遠近がつくられてゐる、
山と川とがつくられてゐる。

木に雨のふるのはいゝものだ、
友よ、石に雨のふるのは更にいゝものだ、
石は濡れてその奇なるすがたをます〳〵奇にする。

わたしはかつて李白の像によく似た石を
見たことがある、
友よ來れ、
石はこの雨をすばらしい詩にしてゐる。

或る縊死者へ

旅人よ、
人生はさびしい川でつくられてゐる、
くらい林でつくられてゐる、
行けども〳〵
永遠につきぬ曠野でつくられてゐる。

旅人よ、
とてもこの坂道は越えられさうにないだらう——
君はもうたいへんに疲れてゐる。

氣の毒な旅人よ、
人生は
いつも貧乏と飢餓と病氣でいつぱいになつてゐる。

もうおもひ切るがいゝ、
幸福は
君のそのみすぼらしい心臓を見たゞけで
知らぬ顔して逃げ出すだらう。

旅人よ、
そこでもし君がほんとうに死を望むなら
ちやうどいゝ、その道ばたに立つてゐる高い木をあふいで見給へ。

氣の毒な旅人よ、
死は
僅か十四五分で來るさうである、
で、そのあひだにわれ〳〵は木の枝に黒い鳥を一羽
描くとしよう。

握れる掌

路ばたにたふれた
死人のかたく握つた手を、
檢視者よ、汝の
生けるちからで開くべからず。

生けるものゝちからは
おそろしい暴逆をはたらく故に、
檢視者よ、
みだりにその手に觸るゝべからず。

この世界から何を握つてゆくのか、
いまはのちからの限り
かたく握つた死人の手の
ふかい秘密をのぞくべからず。

檢視者よ、
そのつよいふしぎなちからを譽めてやるがいゝ、

彼れは今うつくしい神の御國へ
うつくしいお土產を持つてゆくところです。

夕べ

僕の國にはたくさんな赤い〳〵土の層があり
それがあの高い山をつくつてゐる、
山の片がはに大きな斷層があり
その一端に胸をひろげた赤い〳〵土が出てゐる。

僕はその土の中からうまれた——
そして木の枝の生える如く
その赤い〳〵土が僕の手になり、

足になり、
思想になつた。

こゝにひとりの地の子がゐる——
地の幻影にみたされた一つの意思があり
それが地のふかい底へ通じてゐる。

友だちよ、
君は或るうすぐらい沼のほとりにうまれたといふ、
（それ故に君と僕とのちがひがあり
にんげんのちがひがある）

とほく別れた友だちよ、
沼の日はどんなにか憂鬱に暮れるであらう、
その夕べ君もまたどんなにかさびしいだらう。

（それは今あらゆるものに空間が來るのだ）
僕の國でもちやうど日が暮れかゝつてゐる。

友だちよ、
夜はふしぎな空間である——
君があのうすぐらい沼のなかにはいつてしまふ時、
僕もまた地の底へきえうせて行くだらう。

さやうなら、
さやうなら。

五階の窓から

高い〳〵窓から覗くと、
木がさかさまに生え
にんげんがさかさまに歩いてゐる。

ちやうど今うつくしい花をつけた木がさかさまに生えてゐるのは、
高い〳〵空から映つた木のかげではない、
さかさまに立つてゐる煙突も又その煙りも、
高い〳〵空からさした黒いかげではない。

それをうたがふ人があるなら
日本でいちばんすぐれた詩人萩原朔太郎氏に
聞いて見るがいゝ、
そこにはまだキリストや佛陀のやうな人々ですら
知らずにゐるふしぎな思想があるだらう。

さあみんな五階の窓に來たらどうです、
そして誰れもが知らずにゐる深い思想を
いちばんさきに見出すがいゝ。

みんなふしぎな幻影でいつぱいになり

つひに氣がちがふかも知れぬが、
にんげんの眼がさかさまに映つてゐるのではない、
それをうたがふ人があるなら
ふしぎな言葉でうたうた『月に吠える』を讀むがいゝ。

五階の窓は未知の思想を敎へます——
それをうたがふ人があるなら
ふしぎな幻影にみち〳〵た『靑猫』を讀むがいゝ。

竹と風と石

弟よ、
わたしが竹を庭前に植ゑやうといふのは

竹はよく風のすがたを知つてゐるからだ。

竹はたゞすこし葉を殘して植ゑればいゝ、
弟よもうすこし枝を剪つてくれ、
それでいゝ、まつすぐに植ゑてくれたまへ。

竹は陰なるもの、
おそらくは夜あふいだら病的に見えるであらう、
夜なかすぎには妖氣を帶びてゐるだらう。

だが弟よ、竹はふしぎなちからを持つてゐる——
竹はよく風の性を知り

そしてよく風の思想を現はす。

竹の葉のゆれうごくところに
竹は眼に見えぬ風のすがたを描いてゐる、
わたしにはその風のすがたがおもしろいのだ。

竹は陰なるもの、魔性のもの、
ふしぎにして神秘なもの。

このひろ〳〵としたうすぐらい庭園を眺めて
風を待つ夕ぐれ、
風もまた陰にして魔性のもの。

弟よ、
もし更にふしぎな竹のちからを知らうとするには
そのかたはらにおほきな石を置くがいゝ。

石もまた陰にして神秘なもの、
そしてこの庭園をどんなにか幽邃(ゆうすい)にしてくれるだらう

詩集　眼と眼

定價金貳圓

大正十五年一月十日印刷
大正十五年一月十五日出版

著者　加藤介春

發行者　前田隆一
東京市日本橋區檜物町九番地

印刷者

發行所　東京市日本橋區檜物町九
振替東京三三一六番
振替長野三二六八番
紅玉堂書店

●紅玉堂刊行詩書々目●

國木田獨歩著
獨歩詩集
定價一圓拾錢送費六錢

獨歩は詩人也。其の眞面目は寧ろ詩に於て窺ふべし。明治詩壇先覺に乏しからずと雖、眞にその聲心靈より出でて、珠玉の調をなせるものは稀也。獨歩氏の詩醇正素朴、優に傳へて明治詩壇の珍寶となすに足れり。敢て故人を愛慕する諸君に奬む。

若目田三郎譯
ロシア詩集
幻の鐘
定價九十錢送費六錢

今迄の纖細華麗な詩は甘い菓子のやうに、既に我等を飽かしめた。新時代に眼醒めた民衆は、改造世界の曉鐘を亂打する力强い詩を欲してゐる。こゝにロシアの詩がある。一行一句は血に滲み、新生命の熱血に脈うつてゐる。聞け、海の向うから友の絕叫！

勝田香月著
抒情詩集
さびしき人々へ
定價九十五錢送費六錢

さびしく、美しく、はた悲しき一編の抒情詩集。破れたる胸を抱きて生麥の獨居に、しみじみと若きものゝ惱みを歌ひ出でたる著者が詩を誦せよ。此の可憐の美しき、さびしき詩集は、必ずや諸君に深刻なる感激を與へるであらう。

勝田香月著

哀別

定價九十五錢送費八錢

青春の日の苦痛、悲哀、煩悶、寂寥を歌ひこめたる著者の悲しき近著詩集、情熱火の如き革命詩人の悲戀の曲は、高々と諸君が胸底に鳴渡るであらう。此の詩集は一面又現社會への反抗の詩集でもある。

浦瀬白雨譯

現代英米詩選

定價一圓五十錢送費八錢

詩學と韻律の間に爛熟し果てた英詩は、今や街頭の騒音の中に、農夫の額の汗に、その多彩なる姿を以て甦つた。本書は現代英米詩壇を形成する二十餘詩人の作品中より最も代表的なるもの數十編を選び、流麗正確の筆を以て譯出せる新著である。

新島榮治著

濕地の火

定價一圓三十錢送費八錢

此の詩集には薄暗い書屋で細い手では書かれたやうな詩は一つもない。それは赫々たる太陽の下で、節くれ立つた手が民衆の上に投げつけた生命そのものの叫びだ。彼の聲は纖細に流れるのではなくて、傳統の夢を破つて轟然と爆發するのだ。

●紅玉堂刊行詩書々目●

新島榮治著

詩集

隣人

定價一圓卅錢送費八錢

無產詩人新島榮治の出現は詩壇近來の異彩であらねばならぬ。彼の詩は一切の詩韻や律脚から放たれて、高らかに反逆を唱へ、自由を歌ふ。彼こそは眞に新社會へ魁する革命の皷手だ。「隣人よ！」滿腔の情熱を吐露して彼は如何に叫びかけたか。

河井醉茗編

近代詩用語辭典

定價一圓八十錢送費八錢

詩壇の耆宿河井氏が、詩に參ずる者に、それぞれ尊いヒントを得させやうと、明治大正の詩書九十二冊を悉く讀了し、そのうちより名句と思はるゝもの約二千を拔き、これを八十餘門に分類した唯一の詩辭典。詩感の源泉であり、又詩神の殿堂である。

松原至大著

詩集

海の愛

定價八十五錢送費六錢

此の人の詩は實に人知れず谷間の岩の裂目を洩れる水の滴りである。しかも、また滾々と沸きて流れる川ともならない。それはたゞ來り求める疲れた旅人にのみ掬まるべき生命の潤ひに外ならない。

（相馬御風氏）

●紅玉堂刊行歌學書●

石川啄木著
啄木歌集
定價一圓　送費六錢

啄木は新歌壇第二次の革命者也。彼は曾て短歌が歩まざりし大膽勇敢なる境地を開拓せり。即ち彼の纖細華麗なる情操を弄ぶを以て能事とせる長袖者流のヂレッタンチズムを蹴破して、自己の生活を歌ひ眞に短歌としてその居る處に居らしめたり。

松村英一編
改選現代短歌用語辭典
定價一圓八十錢送費六錢

本書は古語新語を問はず、現代の短歌に用ひられたる語を成句にして三千句、單語にして約一萬語を集め、その意義を解明すると共に、一々實例歌を現代歌壇の大家の作に依つて示したれば、作歌に志す者の無二の良師友にして、歌壇恒久の經典たり。

半田良平著
短歌新考
定價二圓三十錢送費十錢

我が新歌壇の中堅作家にして、然も卓絶せる文藝批評家たる著者が、苦き歌作の體驗より生れたる歌論と、親しみ深き感想を集めたるものにして、一面透徹せる歌道の新考察たると共に、他面作歌の眞諦を極めんとする者への深遠なる啓示である。

●紅玉堂刊行歌學書●

松村英一著
歌集やまずげ
定價三圓　送費十二錢

世の雜音を離れて獨り靜かに歌へる著者の心境は今や渾熱の域に至れり。その質實なる歌風、平明溫藉なる歌品は著者が濃厚なる人間味を傳へて餘す所なし。沈滯凝固せる歌壇に一味清新の氣を齎すものは即ち是也。

花田比露思著
歌についての考察
定價二圓五十錢送費十二錢

自己の生活の純眞化を歌に求めて居る著者の過去九年間に於ける考察感想の集積であつて、境は既に宗教に入り心の据え方、時代との交渉、用語、寫生、連作、選、批評等あらゆる問題に觸れて、著者の透徹せる見解を下せるもの、恐らくは歌壇のバイブルたるべし。

尾山篤二郎著
處女歌集
定價一圓八十錢送費八錢

今次の大震災を紀念すべく、著者が過去の歌集を集めて自から改選せるものにしてその風韻の高雅にして楚々たる、情緒の纏綿として盡きざる、歌壇其比を見ず。一感傷主義者としての著者を未だ知らざる人々の前に、この一書を捧げて清鑑を俟つ。

●紅玉堂刊行歌學書●

半田良平著
歌集 野づかさ
定價二圓 送費八錢

古人の句に『天地寂然とし動かず、而して氣機息むことなし。』とあはまさに息むことなき天地の氣機を透し、この寂然として動かざる姿に心を通はしてゐる。沈潛すること深ければ深いだけ、發する所いよ〳〵深い所以である。
（松村英一氏）

土岐善麿著
歌集 綠の斜面
定價二圓五十錢送費十二錢

著者の大震火災における異常の體驗と心境の自由な表現は、歌壇の異彩として注目の焦點となりつゝあるが、この新著にはこれ等近業の全部を收め、通卷八百首、新らしき生命の發露は、謂ゆる生活派の純正な代表的作品である。

西村陽吉著
歌集 第一の街
定價一圓九十錢送費十錢

著者は啄木以後の生活歌人民衆歌人である。歌壇近時の古典的流風に染まず獨自の歌風を把持して現實の上に立つた新浪曼主義新抒情主義の來るべき傾向を暗指するものはこの集である。歌數九百首、洵に生活派第一の代表的歌集である。

●紅玉堂刊行歌學書●

窪田空穗著
短歌隨見
定價二圓五十錢送費十二錢

歌壇の權威空穗氏が、その該博なる知見と、透徹せる鑑賞力とを傾けたる唯一の歌論集にして、評釋、批評、感想の三編より成り一面作歌者の良師友たると共に、他面斯界の區々たる論爭を超へて、當來歌壇の方向を啓示せる好文字である。

松村英一編
代匠記・考略解・古義 萬葉集
定價二圓八十錢送費十二錢

萬葉集全釋中の代表書たる、契沖の「代匠記」、宣淵の「考」、千蔭の「略解」雅澄の「古義」等四書の訓み方を悉く集成して假名混りに書き換へたるもの。編者長日月の献身的努力に成れる古典の綜合は、國文學上、意義深き文献たるを失はぬ。

松村英一編
現代一萬歌集
定價二圓三十錢送費十錢

敷島の國日本が生んだ純粹な鄕土藝術として、短歌が現今の時代程隆盛を極めてゐることはない。本書は即ち現代歌壇諸星の秀歌佳作の一大集成であつて、實に明治大正の萬葉集として、長く後世に貽す可き鬱然たる大歌書である。

尾上柴舟著

朝ぐもり

定價二圓五十錢送費十二錢

前著『空の色』以後數年間の歌を集めて茲に一卷とし、題して『朝ぐもり』といふ。騷然たる所謂「歌壇」の風潮に泥まず、ひとり虔しく自己の道を歩める著者の歌は、溫雅にして明朗、しかも底に一脈の哀思を湛ふ。その典麗なる裝幀と相俟て歌壇近來の好著たり。

尾山篤二郎著

萬葉集物語

定價一圓八十錢送費八錢

我國古典中殊に難解を以て知られたる萬葉集をして、能ふ限り平易に、而も興味を持つて讀み解き得しめんとしたのが本書である。『萬葉集と皇室歌人』、『大伴家持の戀歌』、『萬葉集小觀』の三編に分つ。萬葉集に關する智識を說述せる唯一の書。

木下利玄著

歌集

紅玉

定價一圓三十錢送費十錢

本書は木下氏が依つて以てその歌壇的地位を確立した重要な歌集である。氏は本書の再版の訂正に刻苦せられつゝ逝かれたが、その透徹せる感情と高雅なる歌風は、珠玉の光輝を本集に放つてゐる。

尾山篤二郎著

短歌五十講

定價二圓三十錢送費十二錢

常に現歌壇の第一戰線に立ち、遠大なる雄筆を振へる著者の歌論歌話五十題、最近の諸論文の外、含蓄ある感想文數十篇及び隨筆等を收め、西行法師論、平賀元義論、源實朝論の如きをも網羅せる點に於て著者の全面目は本書に於て盡きたりと謂ふべし。

窪田空穗著

歌集

泉のほとり

定價一圓　送費八錢

著者の溫雅清明なる作風は、本集に到りて正に渾熟の域に達したりといふべし。題して『泉のほとり』といふ。その淸冽なる水に寫る萬象の影の靜かに、鮮やかなるは、それ著者の心境なるべし。一卷三百首、正に新歌壇の正道を指示するの新聲なり。

尾山篤二郎著

歌集

草籠

定價二圓五十錢送費十二錢

先著「曼珠沙華」以降の作中より一千二十三首を選んで收錄す。暢達自在なる歌調、纏綿たる情緒、正に是れ著者の獨壇場にして、而も句々節々よく朗々吟誦に耐ふ。裝幀豪華典麗、著者の歌風と相俟つて、最近歌壇隨一の好著。

●紅玉堂刊行歌學書●

植松壽樹編著
近世萬葉調短歌集成（一）
定價二圓八十錢送費十二錢

第一卷要目
賀茂翁歌集：賀茂眞淵
天降言：田安宗武
鈴屋古風歌集：本居宣長
槐の落葉：元木田久老
信濃下向の歌：同
平賀元義集：平賀元義

萬葉調歌人として名ある上記諸家の集を收め、詳密な考證的脚註を施して一卷となし近世萬葉調の趨勢を一時の下に收めてその大勢を知るに便ならしむ。

尾山篤二郎著
歌はかうして作る
定價一圓二十錢送費八錢

世に行はるゝ短歌作法書を見ると、大抵は歌の評釋や感想文で埋つてゐて肝腎の「歌を作る方法」乃至「歌の詠める方法」に就いては殆ど書かれてゐない。著者はそれを大變に遺憾とし、多年歌作に從事した實際經驗から、如何なる初學者にでも直ちに理解されるように、本書を著したのである。

著者はまことに謙抑な資質で、作歌をするに當つても、ひとり自ら樂しむといふ風があつた。この集は大正五年以後から最近に至る作中から、三百有餘首を選んで收めたもので、數として甚だ少ないが、然し、一首々々が刮苦の成つた佳作ばかりで、恰も珠玉を連ねたかの如き感を與へる。（松村英一）

小田切浪彥著
歌集 しほさゐ
定價一圓八十錢送費十錢

●紅玉堂刊行新釋和歌叢書●

半田良平著
〔1〕大隈言道歌集

近來民衆歌人の名に於て、頓にその高手を謳はれて來た大隈言道の短歌約二百首を撰び、一首一々に「語義」「大意」「評言」を附して、その間に自ら言道の歌の特質を說いた絕好の評釋書。著者の藝術批評家としての非凡の眼識に就いては世既に定評がある。

橋田東聲著
〔2〕正岡子規歌集

歌人としての正岡子規については、その眞價を十分に知るものは極めて尠ない。今、現歌壇の子規信者たる橋田東聲氏は、本書に於て子規の歌を拔萃し、多年の蘊蓄を傾けて之を釋し、これを批判してをる、まことに新興歌壇の一異彩である。

尾山篤二郎著
〔3〕源實朝歌集

『金槐集』七百十九首より代表的秀歌百四十首を選び、著者獨特の輕妙洒脫なる筆致を以つてその語義を究め歌意を明かにし、且つ峻刻犀利なる批評眼を以つて縱橫無碍に實朝の作歌を品隲したものである。附錄として『實朝覺書』『實朝風流日記』等を附す。

●紅玉堂刊行新釋和歌叢書●

半田良平著

〔4〕香川景樹歌集

我が桂園派の創始者なる香川景樹の歌一首々々に就き、懇切なる註釋を加ふると同時に、その藝術的價値を縱横に評騰して、以て景樹の歌の特色を一目瞭然たらしめて居る。桂園派歌人は勿論、新歌壇の人々にも一讀を薦むる次第である。

相馬御風著

〔5〕良寛和尚歌集

著者相馬氏は、人も知る如く夙に良寛に私淑し、其生活及藝術の研究に沒頭すること多年、良寛の歌百八十餘首につき、一々懇切周到を極めたる註釋を施す傍ら、眞にその滋味の存するところを何人にも肯き得るやうに說かれたものである。

宗不旱著

〔6〕柿本人麿歌集

昔から歌聖と仰がれて居る人麿の短歌約百首、長歌數篇に就き、一首毎に懇切なる註釋を施すと同時に、それらが藝術的特質をも明快に把握し、以て人麿の個性を一目瞭然たらしめたものである。著者は最近歌壇の大家の業績をその辛辣なる筆を以て、縱横に評騰し去りたる不旱生。